随筆集

まわり道の幸せ

長崎源之助

随筆集 まわり道の幸せ

長崎源之助

偕成社

著者略歴

一九二四年、横浜に生まれる。日本児童文学者協会会員。よこはま文庫の会会長。著書に『トンネル山の子どもたち』『ヒョコタンの山羊』（ともに日本児童文学者協会賞）『忘れられた島へ』（野間児童文芸賞）『向こう横町のおいなりさん』『私のよこはま物語』『東京からきた女の子』『どろんこさぶ』『本のある遊び場』など多数がある。

住所／横浜市南区井土ヶ谷中町一五二

まわり道の幸せ

一九八五年五月　初版第一刷

著者　長崎源之助

発行者　今村　廣

発行所　株式会社　偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三―五

振替口座　東京　五―一三五二

印刷所　新興印刷

製本所　文勇堂製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替え致します

© Gennosuke Nagasaki 1985

Printed in Japan

ISBN4-03-003130-7

まわり道の幸せ／目次

Ⅰ

贈ることば——新しいどろんこさぶ君に
京子ちゃんの手紙　14
赤いうちかけ　20
泰山のような人　25
まわり道の幸せ　32
原田泰治の世界　37
日本のお米　45
お幸せに　53
子どもたちへの熱いメッセージ　63

Ⅱ

いもだんごのおねえさん　70

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

平塚武二の嘘と真実　81
建築家サットル氏　91
すばらしい谷間――柿ノ谷　101
『だれも知らない小さな国』が生まれたころ　107
自分の道をみつけること　113
酒とサクランボ　117
「書けそうだ」という幻想　126

Ⅲ

ぼくの児童文学　133
私が筆をとるとき　137
私のヒョコタン　141
『お母さんの紙びな』について　145
子どもとのであいから絵本が生まれる　150
井土ヶ谷小学校ができたころ　157

『私のよこはま物語』　185
ハエと戦車と　187
『東京からきた女の子』のこと　201
コーヒーはこびの記　204
『忘れられた島へ』余話　208
あとがき　227
著作年表　229

装丁協力／山本利一
カバー絵／長崎源之助

まわり道の幸せ

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

贈ることば
――新しいどろんこさぶ君に

読者から手紙をもらうのはとてもうれしいことです。このあいだ、愛知県のご婦人から手紙をいただきました。三年ほど前に『どろんこさぶ』（偕成社刊）を読んで手紙を出したことがあるとかいてありました。それで思い出したのですが、ご主人が左官屋さんなのです。ご自身は児童館で働いていて、そこの図書室にあった拙著、『どろんこさぶ』を借りて読んだのだそうです。『どろんこさぶ』というのは、左官屋だった父をしのんで（といっても父がモデルではありませんが）かいた作品です。そのご婦人は『どろんこさぶ』を読んで、主人の仕事を理解することができました。ありがとうございますという意味の手紙をくれたのです。

こんどの手紙では、その『どろんこさぶ』を手に入れたいが、田舎のことで見つからないので、ご多忙のところ恐縮ですが、なんとかおとりはからいくださいというのです。

というのは、彼女の息子が今年中学を卒業するので、昨年夏ころから進路について先生と

も家族ともいろいろ話し合ってきたが、本人は勉強が苦手で進学はしたくない、それより父について左官を学びたいというのだそうです。その意志も強いようだし、先生も職人に向いているといってくださるので、私どもも喜んで賛成したのです。つきましては、母親のささやかな願いとして、『どろんこさぶ』を息子の手もとにおいてやりたいのです。息子が思いついたときにいつでも読んでくれたら、さぶに共鳴し、さぶを見習うものがあると思います。そして、心の友としてくれたら、どんなにうれしいかしれませんとかいてありました。

あまりかきなれた文章ではなく、やや舌足らずの簡単なものでしたが、私は読んでいて母親の熱い思いがひしひしと伝わってくるのを感じました。

最近では義務教育だけで職業につくものは、ほんのわずかしかいないそうです。子どもの能力や希望に関係なく、親たちは大学へ入れることにきゅうきゅうとしています。よい大学へ入学できれば、まるで幸福が約束されるかのようにです。そういうことがさらに学歴偏重の風潮をあおり、子どもたちによりいっそう受験地獄の苦しみを味わわせているわけですが。

しかし、そうはいうもののほとんどの子が進学するなかで、自分の子だけが高校にも行かないとあっては、親として心配でなりません。経済的には多少苦しくてもせめて高校ぐらいは出してやりたい。だから、息子にもがんばって勉強してもらいたいと願うのは無理ありません。この手紙のご婦人も何度かそのことで、夫や息子とはげしく議論したにちがいありま

せん。その結果息子がどうしても社会人になりたいといったとき、どんなにかさびしく、またどんなにか不安だったか想像できます。だが、息子の性格、資質そのほか種々考え合わせ、左官の道を進むほうが、結局は息子のためにはいいかもしれないという気持ちに至るまでには、ずいぶん紆余曲折があったことでしょう。息子の進路に納得ができたとき、彼女はせめて息子に「さぶ」のように仕事を愛し、誠実な生き方をしてほしいと願ったのでしょう。

そうした母親の気持ちが私にはよくわかるような気がしました。そこで、さっそく出版社から本をとりよせて進呈し、息子さんに手紙をかきました。

しかたなく惰性で勉強するより、目的に向かって修業するほうが、どのくらい賢明かしれない。だが、もし勉強がいやだからという逃げの気持ちだけで、左官になろうとするのならまちがっている。自分がこの道を選んだ以上、将来高校へ行かなかったことを後悔したり、絶対劣等感をもたない決心をしてもらいたい。そのためには、だれにも負けないりっぱな職人になるようがんばってほしいとかきました。そして、本の見返しに、新しいどろんこさぶ君に贈ることばとして、「精いっぱい」としたためました。

折り返し、ご婦人と息子さんから礼状が届きました。母親のほうには、こうかいてありました。

「月曜日は児童館が休みなので、主人について仕事にいきましたが、帰宅すると、息子が届

いたばかりの真新しい本を手にして本当にうれしそうにしていました。
なんとお礼をいっていいのか、もうことばがありません。うれしくて涙が出る思いでした。先生がご心配して下さいました不安が、私どもに全くないわけではありません。しかし、本人自身ある程度決意したことでもありますし、担任の先生も賛成して下さっているので、皆で見守ってはげましてゆく覚悟です。(略)」
そして、別便で家でつくったのでおいしくはありませんが食べてくださいといって、モチ米を送ってくれました。
息子さんの手紙は次のようでした。
「本をどうもありがとうございました。
〈精いっぱい〉左官仕事をしたいと思います。
この本は、ぼくの一生の思い出になると思います。そして、ぼくがおとうさんになったとき、子どもにぼくの左官人生をこの本と共に話して聞かせてあげたいです。
同封してある毛針はぼくの作ったものです。本のお礼にはならないと思いますが、どうか受け取って下さい。」
それが全文です。短いが一生懸命かいたにちがいありません。めったに手紙などかいたことのない少年のこれが精いっぱいの感謝のことばなのです。上手とはいえないが、ていねい

な文字がならんでいました。

茶色い鳥の毛のついたつり針が三つ入っていました。こまかい針に小さな毛をつける作業はかなり根気がいったことでしょう。残念ながら私はつりをしないので、せっかくの贈り物なのに役に立ててあげられず、なんだかわるいような気がしました。

でも、魚のかわりにでっかい作品をつりあげるためのお守りとしてたいせつにしますと、返事をかきました。そして、「何時か、君が塗った壁を見に行きたいものです」と結びました。

そうかき終わったとき、私の目に父がはじめて一人で仕上げたという土蔵の白壁がうかんできました。もちろん、その白壁を私は見たわけではありません。でも、無口な父がめずらしく自慢げに話していたその白壁が、私には鮮明に想像できるのです。その白壁は夕焼けのなかにそびえていました。そばにまっ赤な実をつけた柿の木が立っていて、その影が壁にくっきり投影していました。

その美しい光景は、私のなかにある、左官ひとすじに生きた父の象徴でもあります。

そんな仕事を、新しいどろんこさぶ君がやれるのは、いつのことでしょうか。その日が早く来るのを祈らずにはおれません。

（「よこはま文庫の会々報」No.64）

京子ちゃんの手紙

めずらしいことに、偕成社の今村廣社長から電話をもらった。

「べつにたいした用事ではないんですがね」とことわりながら、

「家内が身障者のボランティア活動をやっていましてね、先日、この春大学生になった視覚障害の人を数名、拙宅に招いて話し合いをしたんですがね、そのなかの一人が、わたしは長崎さんを知っているというんです。ずっと前に豆の木文庫にも行ったことがあるし、本をもらったこともあるといってました。国政京子さんっていうんですがね。おぼえていますか。」といった。

京子ちゃんのことならよくおぼえている。もう十年も前のことになるだろうか。あるとき、こんな手紙がとどいた。

「わたしは、かつしかもう学校三年国政京子です。三年生のクラスは、たった三人です。お

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.